

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)

大学院生研究

2014年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻		
研究代表者 (2015年3月現在 のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科・ 異文化コミュニケーション専攻・博 士課程後期課程1年次	瀧戸 彩花 印	
指導教員	所属・職名	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科・ 教授	野田 研一 印	
自然・人文 ・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 共同 名
研究課題	カバー音楽における身体・声・象徴：音楽著作権とパフォーマンスの観点から		
研究組織 (2015年3月現在 のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科・ 異文化コミュニケーション専攻・博 士課程後期課程1年次	瀧戸 彩花	
研究期間	2014 年度		
研究経費	(支出金額) 200,000 円 / (採択金額) 200,000 円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、現代の音楽に関わる人間（アーティスト及び制作者、聴衆他）、特に音楽活動経験者に焦点を当て、カバー音楽に関連する諸活動の体系を明らかにし、楽曲全体における声や身体を用いた表現及び技法、楽曲を演奏する際のパフォーマンス（しぐさ・表情・ボディランゲージや演出）に対する人びとの認識を検証する。1990年代後半から2000年代にかけて潮流となったポピュラー音楽におけるカバー音楽を調査範囲の中心とする一方で、古来からのカバー行為自体が如何にして音楽を伝達、表現してきたかにも着眼して研究を行う。主な研究方法は、①文献調査、②ライブ及びイベントのフィールドワーク、③アーティストへの半構造化インタビュー調査、④YouTubeやニコニコ動画等を始めとする動画投稿サイトの楽曲及び映像の分析である。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ カバー音楽と文化 ] [ パフォーマンス ] [ 音楽と映像の著作権 ]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

「ポピュラー音楽とは何か」という問いを明らかにするべく、2010 年以降より調査者の研究題材として挙げられる、歌詞、パフォーマンス、映像、音楽著作権に焦点を当て、音楽における言語・非言語コミュニケーションの研究の一環として本研究を行った。詳細は、2013 年度立教大学学術推進特別重点資金(立教 SFR)大学院生研究 2013 年度研究成果報告書「カバー音楽から見る現代の音楽アーティスト像の変容」を参照されたい。一部の文献についても上記で言及している。近年顕著であるニコニコ動画における「歌ってみた」や「踊ってみた」を始めとする諸楽曲や映像もカバー音楽の一類とし、人と音楽のコミュニケーションを検証することで模倣とカバーの関連性と相違を明示するために、本特別重点資金に採択された 2014 年 6 月初旬から 2014 年 3 月下旬まで資金を活用し、2014 年 9 月よりフィールドワークを行った。

## 1. 研究目的と意義

研究目的については、研究の概要でも述べたとおりである。現代の顕著な現象として挙げられるカバーであるが、未だに本ジャンル、それら事象に関して、学術的な整理がされていないことから研究の必要性は明確である。

## 2. 各調査方法と成果内容

本研究では、調査事項とそれに対する調査方法が多岐に渡ることで、また紙幅の都合上、調査の概要や調査結果において主要な部分を記載することとする。

## ①カバー音楽と日本国内における模倣と音楽の歴史的調査(文献調査)

カバー音楽の狭義の定義は、ある演奏者により録音された特定の曲において、別の演奏者による演奏または再録音である。先行研究として、Magnus, Magnus & Uidhir (2013)、Plasketes (2010) が挙げられる。音楽を用いたコミュニケーションについては、ハーグリーブズ、マクドナルド&ミール(2013)を参照した。

カバー音楽について調査を進めたところ、カバーすること、その行為が、日本人の模倣の文化と深く通じていることが分かった(柴田, 2014; 山田, 2002 他)。録音文化が始まり、著作権により音楽が守られる時代となったことは、ここ 100 年程でまだ歴史が浅い。柴田(2014)によれば、日本における音楽の歴史の胎動期は平安時代からとされており、筆者の調査結果からも同様のことがいえる(調査結果は 2013 年の日本ポピュラー音楽学会大会にて個人発表した)。具体的には催馬楽や朗詠、今様等が挙げられる。

カバーと類似するジャンルについては瀧戸(2013)にて論じているが、ニコニコ動画における「歌ってみた」「演奏してみた」は勿論のこと、「踊ってみた」等の一種のカバー形態の出現は、音楽が聴覚のみならず視覚による認識によって形作られているものであることを明示している。筆者の調査では、ラジオ番組を持つアーティストやライブでの活動を主とするアーティストの場合は、カバーを多用する傾向にあることが明らかとなっており、②で後述する UNCHAIN にも同様のことがいえる。

音楽を媒介としたコミュニケーションについて書かれた著書『音楽的コミュニケーション——心理・教育・文化・脳と臨床からのアプローチ』の第 12 章「音楽的コミュニケーションと子どもたちの音楽実践コミュニティ」において、バレット(2012)は、ポピュラー・ミュージシャンの学習環境について論じている。バレットによれば、若手のミュージシャンがコピーやカバーを用い、ポピュラー・ミュージックの演奏方法を学習することは、私たちがたくさんの音楽実践のコミュニティに参加していることを示しているという。そして、それら音楽実践は録音という文化的なツールを基盤としており、時に他の見習い演奏者のコメントを通して媒介されていると述べている。録音と映像が誕生する以前にもカバーやコピーと類似した行為は存在していたが、著作権の誕生により、音楽の模倣やアレンジ等、楽曲に直接影響する内容よりも、映像等による視覚効果に楽曲の魅力を感じる聴衆が多くなっており、アーティストもそれに答えるようにパフォーマンスを重視していることは明白である。しかしながら、カバー、アレンジという手法により、楽曲の魅力を伝えようとする動きもある。

## ②ライブ及びイベントのフィールドワーク

ライブイベント、コンサート、その他音楽書評会や学会における講演の聴講に本助成金を用いた。特に、ライブにおけるフィールド調査では、現在、カバー音楽をアルバムで発売し、ライブにおいても活発にカバー曲を演奏するバンド「UNCHAIN」に焦点を当て、参与観察を行った。また、上記の他に複数のイベントに参加し、人びとの音楽聴取の形態、非言語コミュニケーションによるアーティストのパフォーマンスを調査し分析した。分析には、増田(2006, pp. 95-116)を用いた。

## ③アーティストへの半構造化インタビュー調査

本研究では、音楽制作者(作編曲、楽器演奏経験あり)3 名にインタビューを行い、内 2 名へのインタビュー調査実施に本助成金を用いた。ここでは紙幅の都合上、上記より 1 名のインタビュー調査の内容を、後述する④楽曲の分析とともに記載する。

## ④ 楽曲及び映像の分析

## ④-1. YouTube やニコニコ動画等を始めとする動画投稿サイトにおけるカバー

2014年11月23日に都内にて行われた楽器フェア2014の「G.O.D.カバーコンテスト2014決勝大会」のフィールドワーク調査の後、本イベントの主催者でもあり演奏者でもある Godspeed 氏にインタビュー調査に協力いただきお話を伺った。また、本研究の遂行にあたり、当日の映像が必要であったため、動画を株式会社 HOT LINE MUSIC 様より拝借した。フィールドワークでは、会場の様子、観客の様子を観察するとともに、現場スタッフの方にもお話を伺った。



演奏者:9名(男性)、観客の傾向:10代後半~20代後半、性別比率:9割以上男性

コンテストの参加方法:既存楽曲(CD音源及びニコニコ動画音源)をニコニコ動画サイトに投稿。

イベントの内容:カバー・コンテスト。主催者(演奏者9名)が、応募者の中からファイナリストを事前に選抜する。「楽器フェア2014」で行われたカバーコンテストでは、応募者からファイナリストを3名選び、当日のブース内にて①原曲者②ファイナリストの順に演奏を行った。今回は全てギター演奏による。インストゥルメンタル曲であり、言語(日本語)による歌詞はない。本報告においては、紙幅の都合より詳細は省くが、本調査により、観客が歌詞の付いていない曲でも奏者のパフォーマンスに注目していることが分かった。技法についての指摘やコメントがニコニコ動画上に寄せられていた。画像は Godspeed 氏の演奏場面の一部である。

④-2. CD音源による原曲とカバー曲の楽曲分析

## ④-2. CD音源による原曲とカバー曲の楽曲分析

図1.「This Love」のサビリズム譜



今回は原曲とカバー曲の分析に STEINBERG 社

の CUBASE Pro8 を用いた。楽曲は何らかの音楽的ファクターによって、原曲との参照関係を保っている。聴衆の楽曲に対する認識は、ほぼアーティストの声や楽器演奏におけるメロディによるところが大きい。動画やライブ上での感想には、聴覚的な要素よりも視覚的な要素、つまりボディランゲージ等の身体動作やパフォーマンスにおけるアクション、PV映像における視覚効果がある。また、ごく少数ではあるが、服装や髪型に着目するものもある。ここでは、フィールド調査及びCD音源において視聴した UNCHAIN のカバー「This Love」とその原曲 MALOON5 の「This Love」について簡易的に記載する。上記図.1は「This Love」のサビ導入部分である。図を見れば分かるように、本曲については、大変興味深いことに、楽器編成、メロディーラインも変わらないため、楽曲の基本構造は原曲とほぼ同一であるが、原曲のアレンジにより、楽曲の同一性を崩すことに成功している。鍵盤楽器などのアレンジや、ギターによるフレーズの即興的变化は、バレット(2012)からも分かるように、オリジナリティを出す方法であるといえる。

## 3. 得られた成果と今後の展望

本研究では、カバー音楽におけるカバーすること、その行為に着眼して研究を行ったが、模倣やカバーという現象は人が誕生し、今日に至るまでに繰り返し行ってきた行為で、日常に根付くものであり、文化形成において重要な役割を担っていることが分かった。本研究において、歌詞があるものとなないものを分析対象として選んだが、歌詞があるもの、ないもの、どちらもパフォーマンスを重視しており、その傾向には著作権の存在が関係している。日本におけるカヴァーの歴史からも明確なように、「模倣&加工なくして、オリジナルは生まれない」(保母, 2004, p. 4)ことから、模倣は常に日本人の文化に存在するものであると考えられる。今後は、歌うことと詠うことの相違などについても詳細に調査していきたい。

## 参考文献一部抜粋

バレット, M(2012).「第12章音楽的コミュニケーションと子どもたちの音楽実践コミュニティ」(星野悦子・編)(佐藤典子・訳)

『音楽的コミュニケーション——心理・教育・文化・脳と臨床からのアプローチ』誠信書房.

保母大三郎(2004).「日本におけるカヴァーの歴史:番外編」pp. 4-5, 柴田修平(編)『カヴァー&トリビュート:A級傑盤セレクト100』音楽出版社.

増田聡(2005).『聴衆をつくる:音楽批評の解体文法』青弓社.

柴田南雄(2014).『音楽史と音楽論』岩波書店.

柴田修平(編)(2004).『カヴァー&トリビュート:A級傑盤セレクト100』音楽出版社.

山田奨治(2002).『日本文化の模倣と創造:オリジナリティとは何か』角川書店.

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

**① [雑誌論文]**

〈投稿を予定している学術雑誌〉

RICS 異文化コミュニケーション学会『異文化コミュニケーション論集』立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科 (2016) に論文投稿を予定。

**④ [学会発表]**

〈発表を行った学会〉

日本ポピュラー音楽学会 (JASPM) 第 26 回年次大会 12 月 6 日、個人発表

〈発表が決定している学会〉

日本ポピュラー音楽学会 (JASPM) 2015 年度関東地区例会 (日付未定)、口頭発表

[研究報告書]

日本ポピュラー音楽学会 (JASPM) 第 26 回年次大会 12 月、大会論集

RISC 異文化コミュニケーション学会 2014 年 6 月、大会論集

〈ニューズレター投稿掲載〉

日本ポピュラー音楽学会 (JASPM) 第 26 回年次大会、大会発表研究報告書、3 月号掲載